

## 鼻の薬、抗ヒスタミン剤について

今年の5月から新しい年号「令和」となりますね。小児科の患者さんは全員「平成」生まれですが、これからは毎年「令和」生れの子供たちが増えていくことになります。

「昭和」生まれの我々は(31歳以上)は一世代も二世代も昔の人になるのでしょうか。

そして戦争を経験していない世代が増え、平和の有難さに身を持って感じる人が少なくなり、防衛と言う名のもとに軍事面が強化されるのを懸念しています。

さて、ほとんどの風邪薬には「抗ヒスタミン剤」が含まれています。鼻水を止める役目があるからです。

しかし、鼻の粘液分泌を抑制するために鼻水が止まる反面、副作用として気道の粘液分泌も抑えてしまい、痰がネバネバになり上手く出せなくなって、咳込みがむしろ強くなる場合があります。

また、中枢神経抑制作用があるために眠気や倦怠感、そして学習能力の低下が懸念されています。

### 「第1世代」の

ペリアクチン(ジプロヘプタジン)、  
ポラミン(クロルフェニラミン)、  
ザジテン(ケトチフェン、スプデル)、  
アタラックス(ヒドロキシジン)、  
レスタミンやベナ(ジフェンヒドラミン)  
は要注意です。

特にけいれんの既往がある患児にはけいれんを誘発させたりするので発熱時には注意が必要でしょう。

### 「第2世代」の

クラリチン(ロタラジン)、  
ザイザル(レボセチリジン)、  
アレグラ(フェキソフェナジン)、  
アレロック(オロパタジン)

は比較的安全ですが、やはり眠気がある人もいます。

「抗ヒスタミン剤」はアトピーやじんま疹などの痒み止めとしても使用されていま

す。副作用の眠気を誘うのも時には必要なので有意義な作用として処方することもあります。

そういう訳で特に小児科では以前ほど抗ヒスタミン剤を風邪薬に入れなくなりました。鼻水で受診した場合でも鼻水を止める抗ヒスタミン剤を処方しないことがありますのでご理解ください。

当クリニックでは漢方薬(小青竜湯(ショウレツトウ)、麻黄湯(マウトウ)、葛根湯加川芎辛夷(カクコトウカセンキュウソウイ)など)をシロップにして処方する機会が多くなりました。美味しく飲んでくれる子もいれば、ダメの子もいます。

でもお薬に頼らず、特に赤ちゃんの鼻水・鼻づまりは吸引してやるのが一番です。子どもの鼻水はまめに拭いてあげたり、かむのを教えたりして下さい。(たまなは)

